

# 緩山河

## 第30号

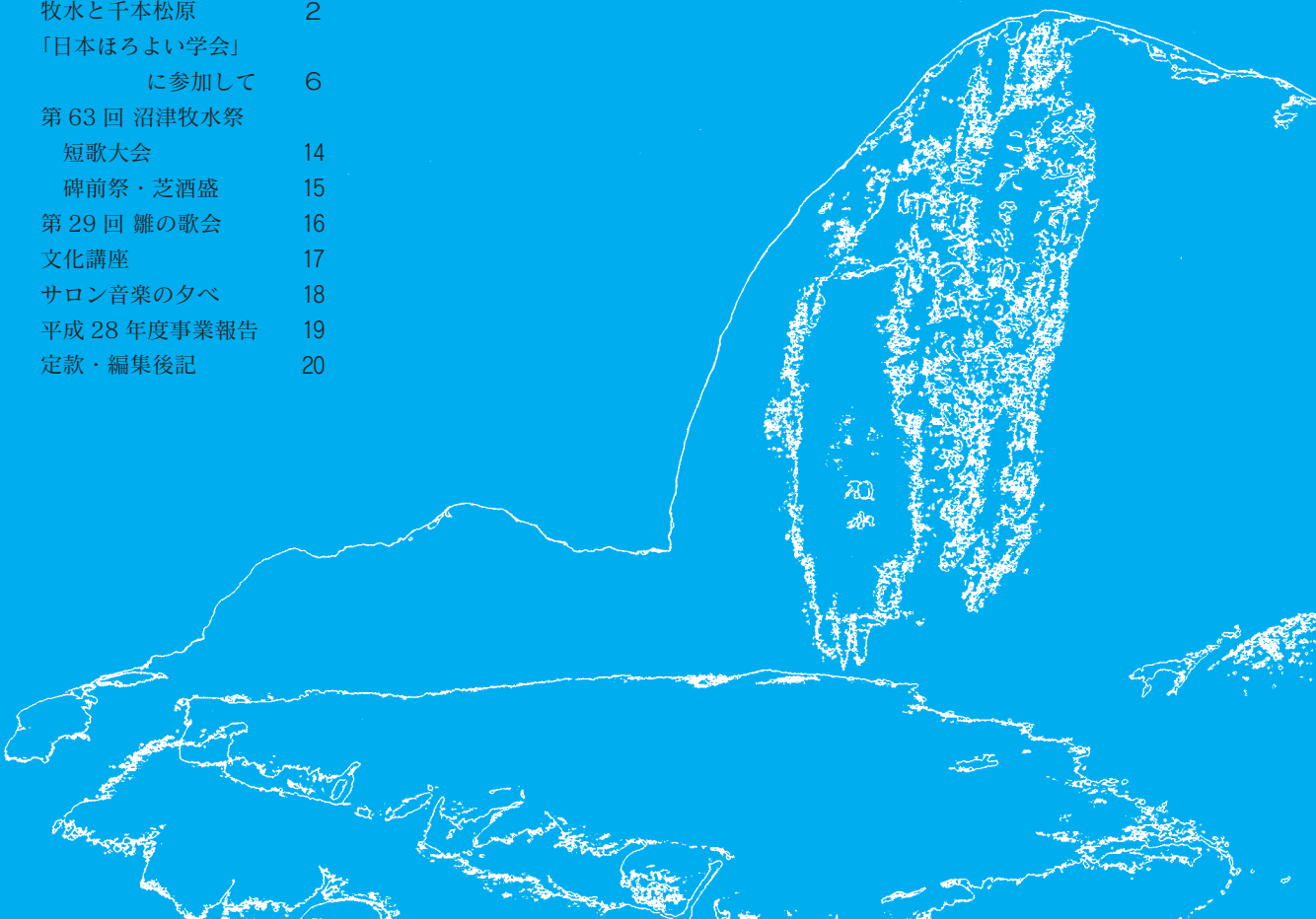
平成29年5月15日

発行

公益社団法人沼津牧水会

### 目次

牧水と千本松原	2
「日本ほろよい学会」 に参加して	6
第63回 沼津牧水祭 短歌大会	14
碑前祭・芝酒盛	15
第29回 籬の歌会	16
文化講座	17
サロン音楽の夕べ	18
平成28年度事業報告	19
定款・編集後記	20



# 牧水と千本松原

曾根耕一  
(本会理事 杉山重義)

牧水が東京の小石川区金富町から沼津町在楊原村上香貫折坂に居を移したのは大正九年(一九二〇)。大正十三年(一九二四)に千本に転居、翌十四年十月、本字南側(通称市道、現在の本西松下)に新居が完成する。

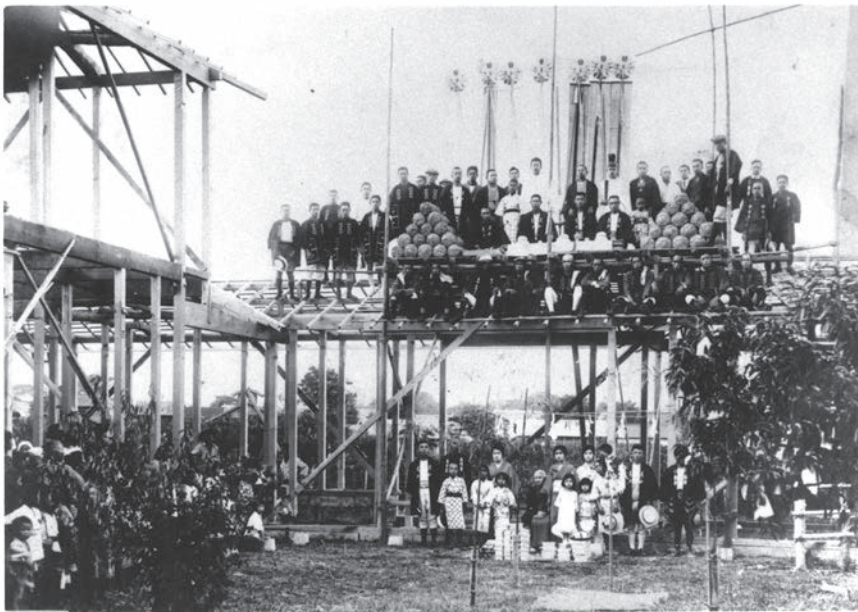
この新居について、大正十四年の『創作』八月号の「創作社便」に次のような一節がある。

七月二十八日、伊豆国土肥村から発動汽船に積み込んで創作社普請用の材木が運ばれて来た。棟梁が土肥村の者なので、同地で全部材木を作り上げ、組み立つるばかりにしてこちらに運んで来たのだ。昨暁快晴好風、千本浜にびたりと着けられた大きな船から二十数人の大工や人夫によつてそれらの担ぎあげらるる光景はいい気持のものであった。全ての宰領をば折柄来合せていた綿引蒼梧君が小生に代つてやつてくれた。そしてそれ等は荷馬車其他により直ちに敷地に運ばれた。昨夜は土肥から棟梁に連れられて来た大工たち十四人を小生方に招待して一緒に夕飯を喰った。中に酒好きの男などもい

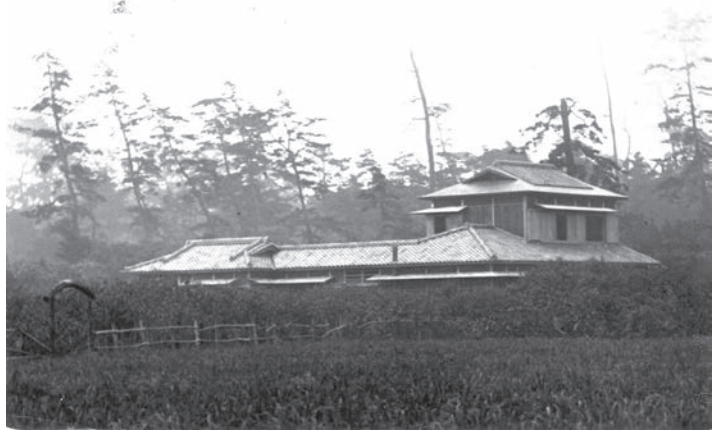
て、賑かなことであつた。今日からどづき其他にかかり、天気一つで八月四日には上棟式が挙げらるる。大抵何処にも本号の届く頃に当る。一杯を挙げて共に祝福していただきたい。二三日中に我等手づからして投げ餅をつく事になつてゐる。白や杵をば長倉汀峰君の家と耕文社とから借りて来るのだ。祭司は高塩背山君が下野国喜連川しもうのくにきつれがわから来て呉れる。和田山蘭君も来るかも知れない。

そして、翌月の『創作』九月号に載せられた「上棟式」の写真の裏に、次のような説明がある。

この八月四日、創作社の上棟式が挙げられた。図はそれを示すものである。これに先立つ二日、先ず投げ餅をついた。餅屋の職人三人が来てついたので、中二白をば大悟法君、同じく二白



を耕文社の芦川君がつき、小生は三杵を試みた。ちぎり役は職人、まるめるのはわざわざその日の加勢に来て呉れた山崎斌君夫人とその娘たち二人、小生方の子



供四人（内一人は甥）の役であった。明けて三日、式の祭司をつとむべく下野国喜連川から高塩青山君が愛子幸雄君を連れて遙々と来て呉れた。愈々当日、式は実に賑々しく行われた。式場は二階の屋根に設けらるべきであったが、それでは小生がよう登れないというので、離宅の様になった平屋建の屋根（丁度喜志子の

部屋の上）にしつらえ、種々の式具、三十俵の餅を其処に積上げ、厳かに祝詞は上げられ、玉串は捧げられ、やがて餅まきが始まった。いつの間に斯う集つたか二百人程の餅ひろいが集つて来ていて拾い争う光景は実に壯観を極めた。丁度休暇で帰省中の服部純雄さんはわざわざ八十余歳の祖母君を連れて参列して呉れた。家内皆この高齢にあやかれとの厚意であった。屋根の式場から見渡す千本松原の松の茂み松のつらなりの静けさ美しさは全く予想以上のものであった。式果てて其場にて一同冷酒を酌み、来賓と重立つた大工職人三十人あまりは更らに小生方に引上げて祝宴を開いた。残念なのは今度の建築事業の総参謀である長倉汀峰君が止むなき所用のためこの写真に遅れた事と設計技師村井武君が同じく不参加した事であった。

上棟式の写真には、職人たちが「若山」と染め抜いた印半纏を着て写っており、牧水が印半纏を設えて上棟式に臨むほど、新居の完成を待ち望んでいたことがうかがえる。

牧水と喜志子夫人は、上棟式の写真にそれぞれ次の短歌を書いて、土肥の大工棟梁西川百之助に差し上げている。

むねあげの祝ひのもちをわがまくや千本  
松原の松の数ほど  
牧水

こころ入れて君が造りし此の家に住みて  
いよいよ名をしたつべし  
喜志子

新居は、牧水がよよく愛した千本松原に隣接した土地に建てた。牧水は、福沢諭吉の創刊した「時事新報」（大正十四年九月十四日〜十六日）に寄稿した「沼津千本松原」に、私が沼津に越して来ていつか七年経つた。或はこのまま此処に居据わることになるかもしれない。沼津に何の取柄があるのではないが、ただ一つ私の自慢するものがある。千本松原である。

と書き始めている。

千本松原位い見事な松が揃つてまたこの位の大きな豊さを持った松原は恐らく他にないと思う。狩野川の川口に起つて、千本浜、片浜、原、田子の浦の海岸に沿い徐に彎曲しながら遠く西、富士川の川口に及んでいる。……

と、千本松原の全貌を書き、次にその特色を単に松ばかりが砂の上に並んでいる所謂白砂青松式でないことである。白砂青松は明るくて綺麗ではあるが、見た感じが浅い、飽き易い。此処には聳え立つた松

の下草に見ごとな雑木林が繁茂しているのである。下草だの雑木だのといつても一握りの小さな枝幹を想像してはいけない。いずれも一抱え前後、或はそれを越えていくものがある。

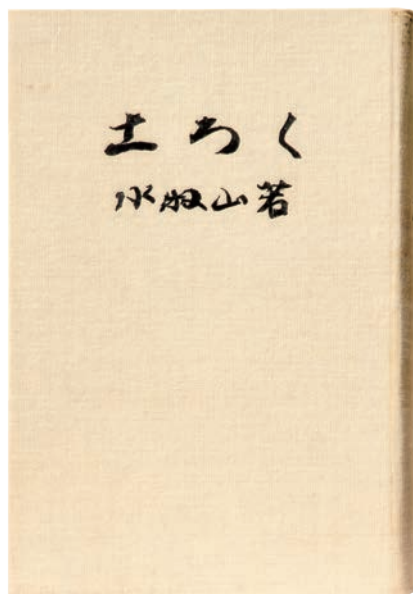
牧水の自然描写は先ずは千本松原の全体像の描写に始まり、その雑木の種類・その繁みを住居とする野鳥を語り、紅葉を見られない暖地植物の四季が述べられ、原町まで続く松原沿いの小径甲州街道の歩きを、風物詩的に述べた後、牧水の菩提寺となつた「千本山乗運寺」について書いている。

沼津から千本浜へ出ようとする浜道の右手に千本山乗運寺という寺がある。当代よりは二十六世以前、山城国延暦寺乗運公の実弟、増誉上人という人がこの沼津の地に來り、以前鬱蒼として茂つていたと伝えらるる松原が相模の北條と甲斐の武田との戦いの戦略から一本残らず伐り払われ、見る影もない荊棘の曠原となつていたのを嘆き自ら植樹に着手した。然し、今もそうだが、此処の浜は砂地でなく荒い石の原である。植えてもなかなか根づかない。ために上人は一本植うるごとに阿弥陀経を誦し、植え且つ読経しながら辛うじて先ず一千本を植えつけ

た。．．（中略）．．松原の絶えていた時代、その西風が海から汐煙を吹きあげて遠く四周に撒き散らし、農作物は出来なくなつてしまつた。増誉上人は単に松の眺めの絶えたを惜しんだばかりでなく、斯うした濟世救民の志もあつたのである。この大きな松原に遮られて汐煙はおろか、風そのものすらも遠く数町の間には落ちて來ぬのである。．．（後略）．．

この見事な描写ぶりに感服する。

千本松原の歴史を振り返ると、牧水が「沼津千本松原」に書いているように、戦国時代に戦乱で伐られた松原を増誉上人が植樹して以來、江戸時代は幕府の御料地として保護され、明治政府もこれに倣い、松も大木として成長を続けていった。しかし、大正の末には静岡県が松林の一部を伐採し、売却処分しようとしたが、牧水や市民の反対で中止された。昭和になると、戦時中の軍命令による松根油採取のための伐採、戦後の高度成長期の石油コンビナート進出計画などが挙げられて、時には時勢に大きく翻弄され荒廃時期もあつたが、その都度、千本松原を守ろうという市民や、景観を阻害してはならぬという



広範な人々の粘り強い取り組みがあつたからこそ、今日があると思う。

第十三歌集『くろ土』（大正十年刊）に載せられた千本松原を詠んだ短歌を紹介しよう。

むきむきに枝の伸びつつ先垂りてならび  
聳ゆる老松が群

風の音こもりて深き松原の老木の松は此  
処に群れ生ふ

立枯の松もまじらふ松原のふかきに入れ  
ば萱の原ある

千よろづの松にまじらふこの松のひたに  
真直ぐにひたに真青き

わが投げし小石の音の石原にひびきて寒  
き冬の日の影

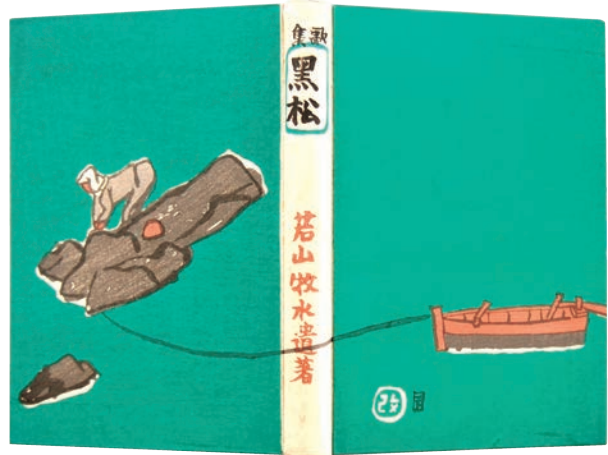
ところで、牧水の旅とは如何なるものだったのか。

そのかみの西行芭蕉良寛の列に誰置くわ  
れ君を置く

と、牧水の師尾上柴舟が、牧水の死を悼んで『創作』の若山牧水追悼号に寄せた挽歌にあるように、牧水は、西行・芭蕉・良寛と並ぶ旅を住処とした歌人である。

牧水の旅を辿ると、明治三十一年三月、母マキと義兄河野佐太郎の金毘羅参りと大阪見物に、無理に頼んだ十五日間の同行が初旅の経験である。それから、没年の昭和三年の八月二十一日、山梨県下部温泉に二泊三日の最後の湯治旅行をするまで、毎年のように旅をしている。その間の旅行日数は実に千六百四日になる。この間に詠んだ歌数は歌集に収録された分だけで二千四百七十九首に及んでいる。歌集にして第一歌集『海の声』（明治四十一年七月）から第十五歌集『黒松』（昭和十三年九月牧水死後発刊）に至る。なお、早稲田大学を卒業して社会人になってからの旅行日数は、千三百八十四日、歌数は二千二百八十六首である。

最終歌集『黒松』に載せられている「沼津千本松原」と題した六十一首の連作のうち、十八首を紹介して擲筆させて頂く。



をりをりに姿見えつつ老松の梢のしげみに  
啼きあそぶ鳥

樂しげの鳥のさまかも羽根に腹に白々と冬  
日あびてあそべる

茂りあふ松の葉かげにこもりたる日ざしは  
冬のむらさきにして

鴨の鳥なきかはしたる松原の下草は枯れて  
みそさざいの声

時すぎし紅葉の枝にふさふさと実を垂らし  
たるあはれ櫨の木

時雨すぎし松の林の下草になびきまつはれ  
る冬の日の靄  
松原のなかのほそみち道ばたになびき伏し  
たる冬草の色

冬といへどぬき沼津の海ぎしの森のみど  
りにさせる天つ日

この森の木々に実ぞある実を啄むと群れた  
る鳥の啼く音こもれり

松葉かくおともこそすれみそさざいあをし  
あどりの啼ける向うに

色さびし櫨のもみち散る遅しおそしと見つ  
つわが飽かなくに

松原の此処は小松のほそき幹はるけくつづ  
きつづくはてなく

かるやかに駆けぬけゆきてふりかへりわれ  
に見入れる犬のひとみよ

銃音にみだれたちたる群鳥のすがたかなし  
も老松がうへに

夙く立てよ狩人來むぞむらがるな其処の枯  
木のうれの小鳥よ

まふ時し黒く見えつつ冬日あびてとまれる  
小鳥ほの白きかも

この小路わがのとぞおもふ朝宵に來りあゆ  
めど逢ふ人なしに

冬寂びし愛鷹山のうへに聳え雪ゆたかなる  
富士の高山

# 「日本ほろよい学会」に参加して

栗原 進  
(本会監事)

第十四回「日本ほろよい学会」が平成二十八年九月三日(土)、秋田駅前「秋田ビューホテル」で開催されました。平成二十八年は、若山牧水が秋田へ訪れて百周年の節目の年でもあり、大変な力の入れようでした。

沼津牧水会から浅井治、金子安夫、長澤靖夫の各理事、石田孜郎、石田多嘉子ご夫妻、鈴木玲子、原悦子、三宅芳則、山下数高の各会員、事務局からは大島葉子、そして監事の栗原進の十一名が参加しました。林茂樹理事長は所用で参加されませんでした。

九月三日午前七時十五分、沼津駅南口に集合し、新幹線で東京へ。秋田新幹線「こまち七号」で秋田に向かいました。沼津駅では林理事長の見送りと差し入れをいただきました。数日前に台風十号が東北地方に上陸し、岩手県、北海道などに甚大な被害を与えた後だけに、秋田市の皆さまは大丈夫だったのかと懸念しての出発でした。列車の遅れはなく、車中では皆和やかに過ごすことができました。「こまち七号」の中では、石田ご夫妻から差し入れていただいた「いぶりがっこ」や乾

燥海鞘<sup>ほぼ</sup>等をつまみに、林理事長の差し入れや浅井理事持参の日本酒を飲み、仙台付近では、四合瓶四本を飲み干してしまいました。

十二時三十分、秋田駅に到着後、「七代佐藤養助秋田店」で美味しい稲庭うどんと高清水の冷酒をいただきました。うどんのたれが「醤油だれ」と「胡麻味噌だれ」の二種類あり、異なった味で稲庭うどんを堪能することができました。昼食後、「日本ほろよい学会」の会場であり、宿泊先でもある「秋田ビューホテル」にチェックインしました。

「日本ほろよい学会」は、午後二時から佐佐木幸綱会長の開会宣言で始まりました。佐佐木会長は、「牧水が百年前に秋田を訪れ、美味しいお酒を飲んで詠まれた短歌の一首

鷺<sup>ひわ</sup>めじろ<sup>やまがら</sup>山雀つばめなきしきり  
さくらはいまだひらかざるなり

が千秋公園に歌碑となつて残されて



「日本ほろよい学会」佐佐木幸綱会長による開会宣言

いる。牧水のことを思い出し、たっぷりお酒を飲んで、ほろよいになり、楽しんでいただきたい」と宣言されました。

続いて、穂積<sup>ほづみ</sup>志秋<sup>もとむ</sup>田市長は、歓迎の挨拶の中で、「石川錬治郎本大会実行委員長は、十六代目の市長であったが、三つの大きな仕事をされた。新庁舎建設のための基金を設立され



伊藤一彦先生



穂積志秋田市長

たこと。平成七年に設立した秋田公立美術工芸短期大学が現在は四年制の大学になり、さらに来年の四月には大学院も設置されることになっている。そして、平成十一年に日本ほろよい学会を立ち上げ継続してくれている」と祝意を示されました。

次いで、日向市若山牧水記念文学館館長であり、毎日歌壇選者でもある伊藤一彦先生に

よる記念講演がありました。伊藤先生は、牧水の初来秋百周年を記念してこのような会を開催してくれた秋田の人たちへの謝意を表した後、牧水について次のように話されました。「牧水は幸せな人だと思う。それは、牧水が歌を作り続けたことと酒により魂の癒しをもたらったからだ。どのような地でも、よき人がいて、よき自然があり、よき酒があれば故郷にすることができた。そのため各地の人たちに愛され続けられている。牧水は山間の宮崎県東郷村坪谷に生まれたので、山の向こうに何かがあるのではないかとあくがれていた。山の向こうに本当の故郷があるのではないかと考えていた。これが原型ではないか。また、千秋公園の歌碑にある歌には鳥が四種類も詠まれていて珍しいが、牧水は耳が良く、鳥の鳴き声が判る人であった。この歌は東北の鳥の豊かさばかりでなく、東北の人々の個性の豊かさを暗示している歌であるかと思う。牧水は大正六年、詩歌雑誌『創作』の弟子に招かれ、再度来秋しているがその時のことを紀行文として残している。当時、牧水は必ずしも人気が高いわけではなかった。歌壇番付の大関クラスは斎藤茂吉、窪田空穂、北原白秋であった。昭和に入るとプロレタリア短歌等が主流になっていった。戦後は第二芸術

論のような、短歌や俳句などやっていていいのかわられるようになり、生き残りのため散文化的な短歌やシュルレアリスムの様な新しいものが生まれてくるようになった。牧水が評価されるようになったのは、昭和五十年前後、佐佐木幸綱氏、大岡信氏が書かれたものによる。私は、高度成長が石油危機によりストップし、本当に金や物が大切なのか、日本人は心の大切さを失っているのではないか、という時代の動きがあったからだと思う。このことが、牧水の持つ自然を愛し、人間を愛することがスポーツを浴びたのだと思う。牧水は、古代の一番いいものを受けついている、その心を持った人が近代に紛れ込んだ様な人だ。私はNHK短歌の選者をやっているが、テーマを一年間牧水でやってくれと言われて驚いている。今まで一年間、同一歌人でやったことはなかった。各回、牧水が旅した土地を取り上げることにした。のどの渴きはビールで癒せるが魂の渴きは酒でしか癒せない」と牧水は言っている」と話されました。

続いて、榎本篁子館長の講話がありました。「牧水の妻若山喜志子は、明治二十一年、長野県塩尻市に生まれた。八人兄弟の四番目だが兄弟は皆歌をたしなんだ。小学校四年生の時の歌が担任教師に絶賛され、太田水



榎本篁子館長

穂の指導を受けるようになった。『女子文壇』に掲載された歌が牧水の目に留まり、長野での歌会の時に喜志子に会った。その頃の牧水は初恋の女性のこと動きが取れなくなっていた。そのような時、喜志子の存在を知り『私を救ってほしい』とプロポーズをした。喜志子はその申し出に悩み抜いた末、駆け落ち同様に東京に行き結婚生活が始まった。文学少女であった喜志子は牧水への憧れもあり上京したが、現実の生活は歌のことを語り合うどころか生活を支えるまでになっていた。四人の子供を産み育てるうち、次第に牧水に歌人として生きてもらうための自分の役割を見出し、毎日を励むようになった。長男旅人は『父が私たち兄弟に残していたものは形の上では借財と生活不安だったが、それを補って余りあるものは愛の真実であった。無形無言ではあるが父の輝かしい遺産であった。どのよ

うに家計が苦しくても、子供たちに回帰させることは無かった』と語っている。牧水の新盆の時、喜志子は『この人とは本質的なものを共有できる、分り合えること深くして、結婚を決意した』と語っている。喜志子は昭和四十三年満八十歳で他界したが、牧水の心を生かし、歌人としての道を一筋に貫いた幸せな人だったと思う。私は、牧水が他界して十一年後に生まれたので接することは無かったが、喜志子の影響を受けた。牧水について喜志子から学ぶというより肌で感じ、生活の中に牧水が付いて回っていたと子供のころは感じていた。喜志子は歌人若山喜志子であり、牧水夫人ではなかった。喜志子は穏やかで、静かでしたが、人を輝かせる力のあったことに女性の持つ力の大きさを教えられた」と話されました。

記念講演会のあと、希望者は、石川錬治郎秋田大会実行委員長案内で千秋公園にある「牧水・旅人父子歌碑」へ。歌碑の説明を聞き、献酒を行いました。沼津牧水会からは浅井理事が献酒をしました。「父子歌碑」に刻まれている旅人の短歌は次の一首です。

旅さなか秋田にやどりし父のうたふかき  
糸にしに今日きざまれぬ



千秋公園の牧水歌碑前にて記念撮影



浅井治理事と石川錬治郎実行委員長





佐佐木幸綱会長

歓迎レセプションは午後四時四十五分から同ホテルで開催されました。主催者を代表して佐佐木幸綱会長は、「二十世紀は酒と文学の時代だった、牧水は静かに酒を飲むが、白秋は騒いで酒を飲んだ。太宰治、野坂昭如、中上健次も酒を飲んだが、中上健次が死んだのが一九九二年で、それ以降の人は村上春樹のようにほとんど酒を飲まなかった。作品の中にも酒はあまり出てこない。文学の中で時代遅れになったのかと感じますが残念である。文学がつまらなくなってきたのは、酒と関係がなくなってきたからかもしれない」と挨拶された。

次に、秋田県内唯一の女性杜氏である舞鶴酒造の工藤華子さんによる「純米酒にかける

— 女性杜氏の挑戦 —」との演題での講話がありました。

「秋田の酒造りは、かつては吟醸酒が主体で、鑑評会で金賞をとることを目指していた。受賞することが杜氏としてのステータスだったし、杜氏として認められ、卸問屋も売ってくれた。自分としてはこのことに疑問を持った。吟醸酒は一口、二口、三口までいいが、だんだん体が受け入れなくなる。このような酒を一般の人たちが飲むのだろうか。一般の人の口に入らないようなものを、なぜ作るのか考えるようになった。かつては女性が杜氏として蔵に入ることは不浄なものとして望まれなかったが、蔵の高齢化に伴い、女性の手も借りたいとの流れになった。しかし、しょうがないから入ってもいい程度で、やる事は限られ、総てに携わることは許してもらえなかった。蔵元の生き残りを考えていた時、知り合いの蔵元の酒を飲ましてもらうと、爛をした熟成した純米酒だった。飲んでみると膨らみがあり、ものすごい純米酒だった。このお酒に頭を叩かれたようで、純米酒のすごさを認識した。大学時代の先輩の方から、自分の酒蔵の将来性を評価してもらい、純米酒で行くことを決意した。蔵元からは総スカンを食らったが、一人で蔵の改革を始

めてみたら協力してくれる人もいた。純米酒は米と水だけで作るのだから、ごまかしがかない。新しい問屋を開拓し、より質の高い純米酒を作ることに努め、十年ぐらいで一つのブランドを立ち上げることができた。米を作ってくれる農家の人に始まり、飲んでくれる人まで多くの人に感謝の意を込め「田た」と名前を付けた。できた酒の大半は五年熟成させている。色が黄色っぽくなり旨味が乗ってお燗にして美味しくなる。お燗は「飛びつきり燗」から「日向燗」まで55℃から35℃までであるが、「飛びつきり燗」にして燗冷ましにすると美味しさが乗ってくるお酒になる。燗冷ましで飲めることが本当の純米酒である。酒は純米、燗ならなおよし』の言葉を胸に酒造りをしてきた。純米酒は悪酔いしないが、水と飲むことで体がほろ酔いとなり翌朝、気持ちの良い寝覚めを迎えることができる」と話されました。

続いて、「旅・酒・鳥」の短歌募集の講評・表彰が行われました。伊藤一彦氏の講評の後、「牧水・旅人父子歌碑賞」「日本ほろよい学会会長佐佐木幸綱賞」「伊藤一彦賞」「秋田市長賞」「秋田県酒造協同組合理事長賞」の表彰および副賞の贈呈がありました。なお「牧水・旅人父子歌碑賞」は、榎本篁子館長が表彰状と副賞の授与をなさいました。

懇親会は、午後六時十五分より行われました。参加者は秋田県内約一一〇名、県外約四〇名で、各テーブルには秋田県の純米酒が並べられ、様々な味を楽しむことができました。また、湯沢市の「湯沢絵じろう」が会場に華を添えていました。アトラクションとして、短歌朗読があつた後、みなかみ、日向、延岡、東京、沼津の各地からの参加者各人の紹介がありました。沼津からの参加者は、長澤理事が日本酒による魂の癒しを必要とする人の順に紹介をし、金子理事が「沼津牧水祭 碑前祭・芝酒盛」について、会場に掲示して下さっていたポスターを提示しながら広報しました。角川書店の編集者等の紹介もあり、午後八時に日向市東郷町若山牧水顕彰会小林理教会長のの中締めで幕を閉じました。



受賞者に代わって表彰を受ける  
石川錬治郎実行委員長



若山牧水延岡顕彰会の  
田丸眞氏



懇親会の会場風景



日向市東郷町若山牧水顕彰会



若山牧水延岡顕彰会



みなかみ町牧水会



東京牧水会田原大三会長

九月四日(日)、二日目は石川錬治郎実行委員長と「秋田比内地鶏や」竹村良司会長のご厚意により、秋田の名所を案内していただきました。移動のバスは、当日の宿でもある「からまつ山荘」のバスを竹村良司会長が手配してくださいました。午前八時十分「秋田ビューホテル」を出発しました。参加者は、延岡、日向、東京そして沼津の会員と石川実行委員長など二十二名でした。まず向かったのは、映画「釣りキチ三平」のロケ地となった民家でした。秋田市内を過ぎ、郊外に出ると、「秋田こまち」が実った田



沼津牧水会

んぼの中を走りましたが、道路の片側には防雪柵が設置されており、雪国であることを改めて感じました。また、田んぼの中に石油採油ポンプがいくつか見られました。八橋油田(やばせでん)とのこと、秋田油田の名残でしょうか。平地から山道に入り道幅が狭くなり、バス一台がやっと通れるような所がロケ地でした。この地区は北ノ又集落で、美しい棚田が広がっている中に萱葺き屋根の「三平の家」があります。現在、住んでいる人はおらず、観光シーズンに合わせて開くとの説明でした。庭の向日葵は終わりコスモスが咲き、一足早い秋の訪れが感じられました。

次に向かったのが石川錬治郎実行委員長のご実家です。明治二十一年に建てられ、敷地面積約九〇〇坪、建坪約一四〇坪、現在の部屋数八室と大変立派な古民家で、今は石川実行委員長の姪御さんご夫妻が十八代目としてお住まいとのこと。玄関から家の中に入ると、まず目に飛び込んできたのは太くて黒い立派な大黒柱でした。石川実行委員長の話では栗の木の柱で全国一の大きさだそうです。梁も太く檜(ひやしき)を使っているそうです。この古民家建築に使われた木材は、すべて石川家の山林から切り出したものだそうで、当時の石川家が広大な山を所有していたことが窺えます。

二十年前に改築した時に、大黒柱など調べたところ、礎石に乗った柱は腐っておらず、そのまま使うことができたそうです。豪雪地帯の日本の建築技術の高さに感心させられました。姪御さんご夫妻から部屋にある書画等の説明を受け、お茶とお菓子をご馳走になりお暇しました。昔この地は「人の数より熊の数の方が多い」と言われていたとのこと、この地の様子がわかるような気がします。

山道を下り、男鹿半島の入口にある食堂「きりん亭」で昼食をとりました。山道で車酔いになり脂汗を流している方もいましたが、昼食にひれ酒を飲んだらすっかり元気になるました、魂が癒されたのでしょうか。

男鹿半島では世界三景の一つと称している寒風山を訪れました。寒風山は大半を芝生で覆われた、なだらかな山容で、山頂には三六〇度見渡せる回転展望台があります。天気が良いければ鳥海山までも見えるとのことでしたが、この日は少し雲があり見ることができませんでした。榎本篁子館長ご家族も、またまた訪れており、お会いすることができました。

次に訪れたのは、ナマハゲ発祥の地の一つとして古くから信仰の対象とされてきた真山神社です。杉木立に囲まれた境内は静かで、古代以来の荘厳な雰囲気を感じることができ



真山神社にて記念撮影

ます。特に滋覚大師の手植えと伝えられる、樹齢千年あまりの榎の巨木は見ごたえがありました。歩いて隣にある男鹿地方の典型的な民家を再現した「男鹿真山伝承館」に行き、ナマハゲ体験をしました。「ナマハゲ」とは、冬に囲炉裏にあたつてしていると手足に「ナモミ」「アマ」と呼ばれる低温火傷ができることがあります、それを剥いで怠け者を懲らしめ、災いを祓い、祝福を与えるという意味の「ナモミ剥ぎ」から「ナマハゲ」となったとの説明がありました。その説明を聞いた後に、「ナマハゲ」が派手に戸をたたいて出てきました。ナマハゲが観客の中を回った後、この家の主人とナ

マハゲとの掛け合い漫才のようなやり取りがユーモラスでした。その後「なまはげ館」で各地区のナマハゲの人形を見学し、各地区のナマハゲが微妙に異なることを知りました。そして午後三時五十分、この日の宿泊地「からまつ山荘」に向かいました。

宿には午後五時三十分に着きました。七時からの晚餐を兼ねた懇親会まで、この宿自慢の源泉掛け流しの「まほろばの湯」「森林の湯」「小町の湯」「窯風呂」を堪能し、一日の疲れを取り、懇親会に臨みました。懇親会は、心尽くしのご馳走と美味しい地酒、ビールが進み話も弾みました。懇親会の合間に、この宿の見所である「東兵衛屋敷」を見学しました。この屋敷は、鮎川義介帝国石油社長の別荘を移築したもので、座敷童が住むと言われています。座敷童を見るとお金も地位も思いのままと言えられています。皆さん何を期待してか、こぞつてこの屋敷へ行きました。座敷童を見た人はいなかったようです。懇親会はカラオケ大会となり、沼津からは三宅さんが大熱唱し、浅井理事もしつとりと歌いました。宴もたけなわとなり、石川実行委員長の「バスストップ」で、懇親会もストップとなりました。



## 第63回沼津牧水祭 短歌大会

十月二日(日)  
午前十時三十分  
沼津市立図書館  
視聴覚ホール



第六十三回沼津牧水祭・短歌大会は、十月二日「りとむ」編集人の今野寿美氏を講師にお迎えして開催された。出詠数九十六首、当日の出席者六十二人。会場の沼津市立図書館視聴覚ホールは、沼津牧水祭実行委員の方々により諸事万般整えられ、受付には今野寿美氏の書籍が並び、常にも増して華やかな気分に包まれていた。

司会の須永秀生氏の挨拶につづく曾根耕一氏の講師紹介では、今野氏の数多あまたの著作を取

り上げながら、古典に精通されたプロフィールを濃こまやかに話された。

今野先生のこの日の装いは、ほんのり桜色のワンピースにお揃いのショールを重ね、お人柄の際立つ上品なコーディネートであった。

「歌ことばの水脈」という演題の講話は、内容の濃いもので、B4二頁に及ぶレジメの何倍ものエピソードがあつて、歯切れのよいユーモアセンスで聴く人を虜にした。先達の短歌を例に引きながらの講話は、古語の持つ美しい響きを実感する。先達の歌ことばの奥深いところを今野先生の世界観で諄々と読み解き、歌ことばの用例を教えてくれた。所定の時間を超えてしまい心残りしきりであった。辞典を繰る習慣とあくなき探究心も見習うべきと、今野先生の博識に魅了された。

昼食後の歌会では、出席者全員の作品に丁寧な講評を戴いた。アドバイスは作者各自の心に届けられたことと思う。

以下は講師選の牧水賞と互選賞各賞入選歌。

牧水賞一席 沼津市 山田純子

朝市の農婦はゆっくり腰伸ばし地産地消の幟をたてる

牧水賞二席 静岡市清水区 小山弘子

七月十日、山開きなり青富士は試歩の廊下に終日みえて

牧水賞三席 富士宮市 小松和子

おのおのに下校の生徒の自転車が風起し  
つつ並びて走る

市長賞 沼津市 山田純子

朝市の農婦はゆっくり腰伸ばし地産地消の幟をたてる

市議会議長賞 駿東郡清水町 前田鐵江

補聴器をつけてなくても子どもらの言ひたいことは目で聞こえます

教育長賞 富士市 飯泉千春

満開の愛鷹つつじの群落にずしんとひびく実弾演習

商工会議所会頭賞 沼津市 桜井光子

手をつなぐ幼は幼の嵩に鳴る落葉の上を歩くその音

観光協会会長賞 沼津市 佐藤なほ子

先行きの半透明なる残生に胡瓜の支柱をつんつん立つる

沼津朝日新聞社賞

田方郡函南町 菅沼あさ子  
帰り来し部屋の長押にわれを待つ若く凜凜しき軍服の夫

マルサン書店賞 三島市 鬼丸早苗

逝きてなほ心に残る一言は遊びに來ませ  
行かざるを悔ゆ

(会員 高木絢子)

## 第63回 沼津牧水祭

### 碑前祭・芝酒盛

十月十六日(日)午前十一時



朝晩は涼しくなってきたものの、好天にめぐまれ、夏日となったこの日、沼津牧水祭「碑前祭・芝酒盛」が盛大に開催された。

林茂樹理事長の開会の挨拶では、築山の造成による松伐採反対運動についての報告があり、これからも松を見守っていかなくてはならないと力強く語られた。中島康司沼津市文化振興課長が栗原裕康沼津市長の祝辞を代読

された。服部裕美子沼津市教育長の祝辞、榎本篁子沼津市若山牧水記念館館長の献花・献酒・挨拶、花柳寿宗師の舞に続いて、中学生短歌コンクールの表彰式が行われた。今年度は一七校一九五二首の応募があり、特選に選ばれた十名の短歌の講評と表彰が行われた。講評をした曾根耕一沼津牧水会理事が「ここで終わりにするのはなく、これからも短歌をつづけていっていただきたい」と結んだ。

次に高田紹代氏が着物姿で牧水の「沼津を詠んだ歌」の独唱と「牧水のうたを歌う会」による合唱があり、碑前祭の式典が終了した。



大きく「牧水」と書かれた酒樽が中央に登場し、会場から拍手と歓声が湧き、田原大三東京牧水会会長、篠原文雄中之条町議会議員、浅原和美沼津市議会議員、榎本館長、服部教育長、野毛孝容牧水荘土肥館会長による鏡割りが行われ、浅原議長の乾杯の音頭で芝酒盛の開始となった。好評をいただいている芝酒盛オリジナル弁当を肴に日本酒を酌み交わしていく。中之条町議会議員九名の参加もあり、各地の参加者が各々に親交を深めていった。

再度登場した、高田紹代氏の牧水の「酒の歌」の独唱、参加者も一緒に歌う一幕も見られた。岳心流沼津愛吟国風会による詩吟、沼津観光ボランティアガイドの合唱、沼津ハーモニカクラブによる合奏と続き、みんなで歌おう「日本の歌・牧水の歌」。参加者が一緒に歌を歌い、さらに楽しい集いとなっていく。

楽しいひと時をさらに盛り上げるかのように「裾野五竜太鼓保存会」の威勢のいい太鼓が鳴り響き、続いて、はせみきた氏の大鼓。お揃いのTシャツを着た太鼓教室の生徒さんも参加して盛会であった。千本浜公園が「ポケモンGO」の聖地となっているので、会場が混雑するのではないかと危惧したが、トラブルもまったくなく、宴を賑やかに終えることができた。参加者は四八六名。

## 第29回 雛の歌会

三月四日(土)  
午後一時三十分  
沼津市若山牧水  
記念館ラウンジ



雛祭りの翌日の三月四日、第二十九回「雛の歌会」は作品七十五首、出席者五十三名で催された。

講師としてお迎えした梅内美華子先生は、昭和四十五年青森県生れ。「かりん」に所属。歌集『横断歩道』で角川短歌賞、『若月祭』で現代短歌新人賞、『エクウス』で芸術選奨文部科学大臣新人賞、葛原妙子賞など受賞され、昨年夏には群馬県の土屋文明記念文学館企画展で記念講演をなさるなど、先生のご活躍はめざましい。

歌評に先立ち、先生は八戸市生れということで、牧水が大正五年、歌友に会うため訪れた青森で詠んだ次の作品を披露されて、親しみを寄せられた。

やと握るその手この手のいづれみな大き  
からぬなき青森人よ 『朝の歌』  
いつか見むいつか来むとてこがれ来しそ  
の青森は雪に埋れ居つ 『朝の歌』

次いで歌評に入る。印象に深かった作品と評を紹介する。

親父の歳とうに過ぎしと云う夫の寝息し  
ずかな羅漢の眠り 高梨照美

着目がいい。仏弟子の眠りのようだという  
視線に夫の格が上がったほほえましい作品。

試着した女と鏡で目を合わせお似合いで  
すね 秋深まりぬ 岸 浩子

「鏡で目を合わせ」は言い得て妙。結句もう  
まく着地した。奥行きのある深さがある。

感覚をどんどん鈍くすることが忍耐だつ  
て 結婚四十余年 村松建彦

結句を初句にしたい。言外に誰かが言つて  
たよが聞こえてくるような省略がいい。

むきだしの背に髪ほどけかかる時海は群  
青わたしは人魚 中安百合子

健康的なエロスがただよい人魚姫のあやし  
さを思わせる作品。

うまいのだが惜しいと言われた作品が多い、  
対比の効きすぎ、セットことは避けたい、結  
句の一字が蛇足だった、上句下句を入れ替え

て見る、などと示される細かな詠法には揃つ

てうなずく。そして時々笑い声も起こるなご  
やかさ。このように作品に寄り添った歌評は  
やさしく暖かくて、指摘されたことばもすん  
なり胸に届く思いのする二時間余りであった。

講師選による入賞歌十首を紹介する。

女中部屋に講義録読みし日はとおく夜更  
け灯して短歌つくりいる 塩谷千鶴子

両頬を掠めて泡が抜けてゆく息が見える  
よ水に潜れば 山田純子

川霧のうすらぎくればむかうより帽子あ  
らはる亡き人つれて 杉山春代

試着した女と鏡で目を合わせお似合いで  
すね 秋深まりぬ 岸 浩子

保育器でかぼそく泣いてた孫むすめ第一  
志望に弾む声 幸田功夫

人込みに入れば足音かき消されどこへ行  
くのだらうか私は 前田鐵江

シルル紀の贈り物なるアンモナイト殻の  
小部屋に秘め事入れたし 橋本真理子

やまひ得て声をなくしし君は今こぼるる  
椿に臉ふるはす 増田啓子

むきだしの背に髪ほどけかかる時海は群  
青わたしは人魚 中安百合子

梅の花咲いたよと告げ自転車にひらりと  
乗りて孫登校す 川辺典代

(本会理事 青木朝子)



# 文 化 講 座

## 初心者のための短歌講座

日 時 平成28年4月～平成29年3月  
毎 月 第2土曜日 午前(全11回)  
講 師 須永秀生氏



## 牧水記念館短歌会

日 時 平成28年4月～平成29年3月  
毎 月 第2土曜日 午後(全11回)  
講 師 須永秀生氏



## 牧水記念館俳句会

日 時 平成28年4月～平成29年3月 隔月第4日曜日 午後(全6回)  
講 師 榎本好宏氏



## 書 道 講 座

日 時 平成28年4月～平成29年3月 毎月第3火曜日 午後(全10回)  
講 師 成田真洞氏



# サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジ

牧水空間に遊ぶ

「ピアノ2題・ヴォーカル・ヴァイオリン」

日 時：平成28年6月19日(日) 午後6時45分

出 演：杉山佳代(ピアノ)、大野浩嗣(ピアノ)

沼野朱音(ヴァイオリン)

小林陽子(ヴォーカル)、小山真律美(ヴォーカル)

渡邊総生(ヴォーカル)、鈴木三郎(ヴォーカル)

来場者：116人



小さなチェンバロコンサート～牧水さんと出会う～

日 時：平成28年8月27日(土) 午後6時45分

出 演：渡辺敏晴(チェンバロ・オカリナ・うた)

渡辺盛雄(テノール)

館林リコーダーアンサンブル

来場者：12人

フルートとチェンバロによるバロックの夕べ

日 時：平成28年11月13日(日) 午後6時45分

出 演：佐々木真(フルート)

杉山佳代(チェンバロ)

来場者：109人



男声コーラス《夢鳴群》

「日本 心に残る、思い出の歌」

日 時：平成28年12月17日(土) 午後6時30分

出 演：夢鳴群(コーラス)、海瀬京子(ピアノ)

中川貴久美(ピアノ)

川島祐子(フルート)

来場者：110人

山内達哉×fumiko

「PAPERMOONのヴァイオリニストによる魅惑の旋律」

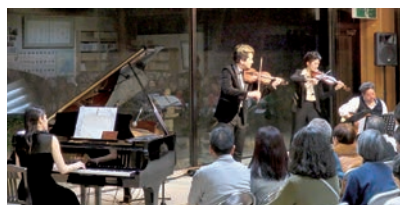
日 時：平成29年2月18日(土) 午後6時30分

出 演：山内達哉(ヴァイオリン)

fumiko(ヴァイオリン)

愛川聡(ギター)、小堺香(ピアノ)

来場者：60人



海瀬京子 ピアノ&トークコンサート

「ヴェルクマイスター音律ピアノで聴く」

日 時：平成29年3月11日(土) 午後6時

出 演：海瀬京子(ピアノ)

来場者：79人

# 平成28年度事業報告

第30回定時会員総会	平成28年5月10日(火) 午後6時～7時		
理事会 第1回(通算154回)	平成28年4月15日(金) 午後6時～7時40分	会報 第29号	平成28年5月15日発行
第2回(通算155回)	平成28年5月10日(火) 午後7時～7時10分		
第3回(通算156回)	平成28年8月9日(火) 午後6時～6時35分	館報 第57号	平成28年9月1日発行
第4回(通算157回)	平成28年12月7日(水) 午後6時～7時	第58号	平成29年3月1日発行
第5回(通算158回)	平成29年3月15日(水) 午後6時30分～7時40分		

## 1 調査研究事業

- (1) 牧水関係資料の収集並びに牧水歌碑の調査
- (2) 第17回「百草園牧水歌碑祭」へ参加(主催:東京牧水会)  
日 時:平成28年8月21日(日) 正午  
会 場:東京都日野市百草園 牧水歌碑前  
参加者:金子安夫、保坂舞夫、原悦子、三宅芳則
- (3) 第14回「日本ほろよい学会」秋田大会(主催:日本ほろよい学会)  
日 時:平成28年9月3日(土)午後2時  
会 場:秋田ビューホテル  
参加者:浅井治、金子安夫、長澤靖夫、栗原進、石田牧郎、石田多嘉子、鈴木玲子、原悦子、三宅芳則、山下数高、大島葉子
- (4) 第66回 日向市の「牧水祭」へ祝電(主催:宮崎県日向市)  
日 時:平成28年9月17日(土) 午前9時30分  
会 場:日向市東郷町坪谷 若山牧水生家裏牧水歌碑前及び牧水公園「ふるさとの家」
- (5) 第60回 暮坂峠「牧水まつり」へ祝電(主催:牧水詩碑保存会)  
日 時:平成28年10月20日(木) 午前11時  
会 場:群馬県吾妻郡中之条町 暮坂峠
- (6) 第83回 延岡市の「牧水歌碑祭」へ祝電(主催:若山牧水延岡顕彰会)  
日 時:平成29年3月19日(日) 正午  
会 場:延岡市 城山公園内 牧水歌碑広場

## 2 第63回 沼津牧水祭の運営

- (1) 短歌大会  
日 時:平成28年10月2日(日) 午前10時30分～午後3時30分  
会 場:沼津市立図書館 視聴覚ホール  
講師:今野寿美氏(「りとむ」編集人)  
応募短歌:96首  
参加者:62人
- (2) 碑前祭・芝居盛  
日 時:平成28年10月16日(日) 午前11時～午後2時30分  
会 場:千本浜公園 牧水歌碑前  
参加者:486人

## 3 文学講演会及び文学講座等の開催

- (1) 第29回「雛の歌会」  
日 時:平成29年3月4日(土) 午後1時30分～4時  
会 場:沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
講師:榎内美華子氏(「かりん」)  
応募短歌:75首  
参加者:53人
- (2) 初心者のための短歌講座  
日 時:平成28年4月～平成29年3月  
毎月第2土曜日 午前10時～12時  
会 場:沼津市若山牧水記念館会議室  
講師:須永秀生氏  
参加者:11回開催 延べ217人
- (3) 牧水記念館短歌会  
日 時:平成28年4月～平成29年3月  
毎月第2土曜日 午後1時30分～3時30分  
会 場:沼津市若山牧水記念館会議室  
講師:須永秀生氏  
参加者:11回開催 延べ106人
- (4) 牧水記念館俳句会  
日 時:平成28年4月～平成29年3月  
隔月第4日曜日 午後2時～4時30分  
会 場:沼津市若山牧水記念館会議室  
講師:榎本好宏氏  
参加者:6回開催 延べ104人
- (5) 書道講座  
日 時:平成28年4月～平成29年3月  
毎月第3火曜日 午後1時～3時  
会 場:沼津市若山牧水記念館会議室  
講師:成田真洞氏  
参加者:10回開催 延べ104人  
●平成28年度「書道講座」受講者作品展示  
期 日:平成29年3月14日(火)～3月26日(日)  
会 場:沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
入場者:234人
- (6) 第27回「中学生短歌コンクール」募集・表彰  
募集期間:平成28年4月19日(火)～7月31日(日)  
会 場:沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
応募短歌:1,952首(17校1,952人)  
入選短歌:52首  
選者:青木朝子、須永秀生、曾根耕一、永久保英敏  
表 彰:平成28年10月16日(日)「沼津牧水祭・碑前祭」にて

## (7) 音楽イベント

- 第1回 牧水の空間に遊ぶ「ピアノ2題・ヴォーカル・ヴァイオリン」  
日 時:平成28年6月19日(日) 午後6時45分  
会 場:沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
出 演:杉山佳代(ピアノ)、大野浩嗣(ピアノ)、沼野朱音(ヴァイオリン)、小林陽子、小山真津美、渡邊総生、鈴木三郎(ヴォーカル)  
来場者:116人
  - 第2回 小さなチェンバロコンサート～牧水さんと出会う～  
日 時:平成28年8月27日(土) 午後6時45分  
会 場:沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
出 演:渡辺敏晴(チェンバロ・オカリナ・うた)、渡辺盛雄(チェンバロ)、館林リコーダーアンサンブル  
来場者:12人
  - 第3回 古楽コンサートシリーズ34  
「フルートとチェンバロによるバロックの夕べ」  
日 時:平成28年11月13日(日) 午後6時45分  
会 場:沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
出 演:佐々木真(フルート)、杉山佳代(チェンバロ)  
来場者:109人
  - 第4回 男声コース《夢鳴群》「日本 心に残る、思い出の歌」  
日 時:平成28年12月17日(土) 午後6時30分  
会 場:沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
出 演:梅原兼美、小澤隆、稀代幸雄、鈴木三郎、渡邊総生、中川賢久美(ピアノ)、川島祐子(フルート)、海瀬京子(ピアノ)  
来場者:110人
  - 第5回 山内達哉 × fumiko  
「PAPERMOONのヴァイオリニストによる魅惑の旋律」  
日 時:平成29年2月18日(土) 午後6時30分  
会 場:沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
出 演:山内達哉、fumiko(ヴァイオリン)、愛川聡(ギター)、小野香(ピアノ)  
来場者:60人
  - 第6回 海瀬京子 ピアノ&トークコンサート  
「ヴェルクマイスター音律ピアノで聴く」  
日 時:平成29年3月11日(土) 午後6時  
会 場:沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
出 演:海瀬京子(ピアノ)  
来場者:79人
- ## 4 その他の事業
- (1) 協賛事業
    - 第87期 将棋「棋聖戦」第3局 羽生善治棋聖 対 永瀬拓矢六段  
(主催:産経新聞社、日本将棋連盟、日本将棋連盟沼津支部、第87期 将棋「棋聖戦」第3局開催実行委員会)  
(後援:沼津市、沼津市教育委員会、沼津倶楽部、プロジェクトN、本会)  
対 局:平成28年7月2日(土) 午前9時 会場:沼津倶楽部  
前夜祭:平成28年7月1日(金) 午後6時 会場:沼津リバーサイドホテル  
こども将棋大会:平成28年6月26日(日) 午前10時  
シニア将棋大会:平成28年6月26日(日) 午前10時  
指導将棋会:平成28年7月2日(土) 午前10時  
大盤解説会:平成28年7月2日(土) 午後2時  
会場は、いずれも沼津市若山牧水記念館  
参加者数:前夜祭 301人、こども将棋大会 76人、シニア将棋大会 14人、指導将棋会 21人、大盤解説会 214人
    - 第41期 囲碁「名人戦」第3局 井山裕太名人 対 高尾紳治九段  
(主催:朝日新聞社、日本棋院、関西棋院、日本棋院沼津支部、第41期 囲碁「名人戦」第3局開催実行委員会)  
(後援:沼津市、沼津市教育委員会、沼津商工会議所、沼津市商工会、沼津観光協会、日本棋院静岡県支部連合会、沼津倶楽部、プロジェクトN、本会)  
対 局:平成28年9月20日(火)21日(水) 午前9時 会場:沼津倶楽部  
前夜祭:平成28年9月19日(月) 午後6時 会場:沼津リバーサイドホテル  
囲碁入門教室:平成28年9月19日(月) 午後1時  
指導将棋会:平成28年9月19日(月) 午後1時  
大盤解説会:平成28年9月21日(水) 午前10時  
会場は、いずれも沼津市若山牧水記念館  
参加者数:前夜祭 273人、囲碁入門教室 18人、指導将棋会 20人、大盤解説会 70人

## 公益社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

- 第一条 この法人は、公益社団法人沼津牧水会と称する。
- 第二条 この法人は、主たる事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の二に置く。
- 第三条 この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短詩型文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。
- 第四条 この法人は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
- (1) 歌人若山牧水に関する調査研究
- (2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
- (3) 文学講演会、文学講座等の開催
- (4) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
- (5) その他この法人の目的を達成するために必要な事業
- 第五条 この法人に次の会員を置く。
- (1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は団体
- (2) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は団体
- (3) 名誉会員 この法人に特に功労のあつた者で、会員総会の決議をもって推薦されたもの
- 第六条 前項の会員をもって、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律上の社員とする。
- この法人の会員にならうとするものは、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続を要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。
- この法人の事業活動に経常的に生じる費用に充てるため、会員になった時及び毎年、会員は、会員総会において別に定める額を支払う義務を負う。
- 第七条
- ### 公益社団法人沼津牧水会入会金及び会費規程
- 第一条 この規程は、公益社団法人沼津牧水会定款第七条に基づき、入会金及び会費について定めることを目的とする。
- 第二条 定款第七条第一項に規定する入会金は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 一〇、〇〇〇円
- (2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上
- 第三条 定款第七条第一項に規定する会費は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 五、〇〇〇円（年額）
- (2) 賛助会員 一〇、〇〇〇円以上（年額）

（理事）長 林 茂樹（副理事長）杉山 光男 須永 英男  
（理）事 浅井 治 保坂 輝夫 田中 和男 金子 安夫 四方 一弥  
八十濱俊一 長澤 靖夫 青木 朝子 河辺龍二郎 杉山 重義  
永久保英敏  
（監）事 鈴木 弘行 栗原 進  
（事務局）大島 葉子 伊藤早智子 近藤美智代 納谷 瑞穂

## 編集後記

平成二十八年は、リオ五輪における日本選手団の金メダルラッシュに沸きました。その年の世相を表す漢字一文字「今年の漢字」は「金」でした。

千本松原を愛し、千本松原を詠んだ牧水、沼津を終焉の地と定めた牧水を紹介する「牧水と千本松原」と題する玉稿を、曾根耕一様（杉山重義理事）が寄せてくださいました。

牧水が秋田を訪れて百周年を記念する「日本ほろよい学会」秋田大会に本会から十二名が参加し、日本酒を愛する方々との交流を深めつつ、牧水を顕彰して参りました。栗原進監事が「紀行文」を寄せてくださいました。

「沼津牧水祭・短歌大会」の講師に今野寿美先生を、「雛の歌会」の講師には梅内美華子先生をお迎えし、充実した歌会が催されました。「沼津牧水祭・碑前祭」は、好天に恵まれ、盛大に開催できました。「短歌講座・短歌会」「俳句会」「書道講座」及び「サロン音楽の夕べ」も例年どおり好評でした。

沼津で初めて、囲碁のタイトル戦が開催されました。「名人戦」七番勝負第三局が沼津倶楽部で、大盤解説会と指導碁会が当記念館で催され、沼津リバーサイドホテルが会場となった前夜祭も、囲碁を愛する大勢の方にご参加いただき盛会裡に終わることができました。

沼津での開催が四年目となった将棋「棋聖戦」五番勝負第三局が沼津倶楽部で開催され、大盤解説会ほかのイベントが当記念館で催され、沼津リバーサイドホテルでの前夜祭にも大勢の将棋ファンが集いました。本年も七月一日が対局、六月三十日に前夜祭が催されます。ぜひご参加ください。

本年は、沼津市若山牧水記念館開館三十周年の記念すべき年です。特別企画展「牧水と旅」を九月二十六日から十二月三日まで開催する予定です。ご期待ください。